Students' Personal Epistemology about Knowledge and Their Career Choices

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2014-01-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: TSUJI, Hiromi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3881

BY-NC-ND

青年期における「知の認識」の発達変化と進路選択の検討[1]

心理学部　心理学科　辻　　弘美

要旨：本研究は、高校３年生および大学１年生の青年を対象に、「知の認識」に関しての個人の考え方について情報収集を行った。これらのデータを、高校３年生という進路決定時期の「知識」の捉え方と、大学１年生のそれが横断的にどのように異なるのかを比較し、その発達の様相について考察した。高校３年生から大学１年生の１年間の発達的な変化には、性差の要因があることを示唆する結果が得られた。また、高校３年生については、進路選択と「知の認識」の関連性についても検討した。大学、短期大学や専門学校進学、就職といった進路によって、「知の認識」に違いがみとめられ、進路選択の際に、「知ること」・「学ぶこと」に対する認識が関係している可能性が示唆された。

キーワード：知識観、認識論的信念、進路選択、キャリア心理学、「知の認識」

序論

知識とは何か。「知識」や「知ること」の営みを、個人がどのように認識しているかについて Personal epistemology という名の心理学的構成概念として、発達過程、ジェンダー、思考と推論、測定法などの様々な視点ら研究がされてきた（Hofer & Pintrich, 1997）。知の認識は一つの構成概念としてとらえることができるほど単純なものではなく、それを単一の方向性をもつ概念として測定することは難しいという批判のもと、Shommer（1990）は、知の認識についての構成概念を５つの独立した側面からとらえよるとした。これらの多次元の構成概念を量的に測定する試みにはじまり、数々の定量的なアプローチに基づく研究が展開されてきた。一方で、これらの構成概念を定量化する中での課題も見いだされてきた。その一つは、提案された理論にある５つの概念、the structure：「知識の構造」、certainty：「知識の確かさ」、source of knowledge: 「知識の源」、the control and speed of knowledge acquisition：「知識習得力」と「知識習得の速さ」、のうち「知識の源」についての構造が確認できなかったことである。また、各構成概念内の一貫性が低く報告される研究結果もみられ（DeBacker, Crowson, Beesley, Thoma, & Hestevold, 2008）、知の認識という複雑で多様な概念をとらえることの難しさが窺える。

国内においても、これらの流れを受けて文化的な差異の検討可能性も含めて研究がすすめられている。複数の定量化のための尺度が検討されるとともに（平山・楠見、2010；野村・丸野、2010）、面接法などの手法を用いて集めた質的なデータをもとに検討（田崎・會田・山際・宮田・渡部、2008）がなされてきた。個人の認識的意識を測定するための主観的評定尺度においては、国外の報告と同様に信頼性の課題が残されている。これらは、「知識」の構成概念が多様性を持つだけでなく、その「知」についての個人の信念を対象とすること自体、曖昧さを含んでいるためであるとも考えられる。

このように「知の認識」を定量化することの難しさについては、方法論の視点から適切な対応が求められるものの、一方でこの捉えづらい概念は、人間の認知発達、学習や動機付けも密接な関連があるとされ、今後の検討が期待されている（Pintrich, 2002）。これらに加えてキャリア発達の視点からも、何を学びと捉えるのか、また何故学ぶ必要があるのか・学びたいのか、といった観点から自分の認識についてしっかりと把握していくことは、個人のキャリアを決定する上で、重要であると考えられる。

そこで本研究では、青年期における大きな発達課題となる進路選択・決定に向きあう高校生３年生を対象に、個人の進路選択・決定は、個人のもつ「知」に対する認識とどのような関係があるのかを検討する。ま

1　本研究は、大阪樟蔭女子大学特別研究助成を受けて実施した。協力いただいた高校生、大学生の皆様に感謝いたします。

た高校生の「知」に対する認識は、既に大学進学をしている大学1年生とどのように異なるのかを検討する中で、高校3年生から大学1年生にかけての、「知」の認識の発達変化について考察する。

個人の「知の認識」の測定については、従来の尺度による主観的評定方法を用いず、Shommer (1990) の5次元構造を意識しながらも、これらの各概念について対立する内容を用意し、どちらの内容に傾倒するかを評定する形式で個人の認識についての情報を得ることとした。加えて、知識の内容については、これまでの尺度などで用いられてきた用語をもとに、身近な知識の内容を提示し、自分の認識に最も近い知識内容から順序を回答する形式を用いた。これらの方法を用いて測定した「知の認識」に関する傾向が、高校生3年生から大学1年生にかけてどのように変化するのか、また高校生においては、「知の認識」が進路決定とどのように関連しているかについて検討する。

方法

対象者　関西地域の高等学校3年生男女135名（うち男子生徒：46名）および女子大学生66名を対象とした。

調査票

「知識の内容」に関する問いは、知識に関する源を中心に、これまでの「Epistemological knowledge」に関する尺度の質問項目で用いられた内容を中心に10項目を取り上げた。これらの内容において、一番自分が知識であると考えるものから順に番号を記入するよう求めた。

「知識の認識」については、Shommer (1990, p. 499) がとりあげた　(a) "Knowledge is simple rather than complex" (Simple Knowledge), (b) "Knowledge is handed down by authority rather than derived from reason" (Omniscient Authority), (c) "Knowledge is certain rather than tentative" (Certain Knowledge), (d) "The ability to learn is innate rather than acquired" (Innate Ability), and (e) "Learning is quick or not at all" (Quick Learning) に沿って、対立する日本語表現を6項目作成した。

これらに加え、高校生については、決定している進路についての記述（大学進学、短大／専門学校進学、就職、その他、未定）を、自己の進路を考える上での重要度を、資格取得、大学進学、経済的な自立、よい会社に就職の中で順位を評定するよう求めた。

手続き

大学生については心理学の授業時間の終わりに、高校生については進学講座の冒頭で、それぞれ、研究の主旨やデータ処理の過程について説明した。質問紙への回答をもって、研究協力への同意を得たものとした。これらの説明内容を理解した上で、回答を10分程度で行うよう求めた。

結果

「知識」の内容や特徴に関する認識の発達的変化

自分が考える「知識」に一番近い内容から順番に評

Table 1. 知識内容の認識に関する高校生および大学生の評定の平均と標準偏差

	High school students						University students		
	Male (N = 46)			Female (N = 88)			Female (N = 66)		
Description of knowledge	RANK	M	SD	RANK	M	SD	RANK	Mean	SD
K1 教科書に書かれていることがら	4	4.98	2.53	7	6.26	2.58	4	4.48	2.26
K2 新聞や雑誌に書かれていることがら	5	5.09	2.78	4	4.78	2.50	3	4.45	2.50
K3 学校の先生が教えてくれることがら	2	4.13	2.33	3	4.57	2.19	6	5.08	2.00
K4 親が教えてくれることがら	3	4.63	2.65	1	2.83	2.06	2	4.17	2.39
K5 様々な考えや情報をもとに検討された結果得られた結論	6	5.17	2.45	5	5.49	2.41	5	4.61	2.92
K6 日常生活をうまく送るために知っておくべきことがら	1	3.65	2.40	2	3.08	2.22	1	3.09	2.14
K7 自分が考えたことがら	7	5.93	3.01	9	7.02	2.44	9	7.86	2.64
K8 資格を得るために知っている必要があるとされることがら	9	7.09	2.51	8	6.89	2.19	7	6.17	2.09
K9 昔から言い伝えられていることがら	8	6.04	2.84	6	5.66	2.70	8	6.50	2.54
K10 今までだれも考えつかなかった新しいことがら	10	7.41	3.13	10	8.39	2.16	10	8.55	2.08

Note: one female high school student gave no response.

定したデータについて、学年、性別の視点から比較分析を行った。高校生男女、および女子大学生のグループ別に、評定値の記述統計を Table 1 に示す。自分の認識に近い知識の内容であるほど、数値が低いことを示す。

知識の認識に関する評定値についてグループ間の平均を比較するため、分散分析を行った。分析の結果、「教科書に書かれていることがら」、「親が教えてくれることがら」、「自分が考えたことがら」、「今までだれも考えつかなかった新しいことがら」について有意差が認められた。「教科書に書かれていることがら」の評定値のグループ間の有意差：$F(2, 197)=10.61$, $p<.001$ は、事後検定（Tukey 法）の結果、女子高校生と比べ、男子高校生や女子大学生がより自分の知識感に近いと評価していたためであった。一方「親が教えてくれることがら」の有意差：$F(2, 197)=11.26$, $p<.001$ は、女子高校生が、男子高校生や女子大学生に比べて、より自分の知識観に近いと評価していたためであった。また、「自分が考えたことがら」の有意差：$F(2, 197)=7.21$, $p=.001$、および「今までだれも考えつかなかった新しいことがら」の有意差：$F(2, 197)=3.43$, $p=.034$ は、男子高校生が女子高校生や女子大学生に比べて、より自分の知識観に近いと評定していたためであった。

「学校の先生が教えてくれることがら」：$F(2, 197)=2.67$, $p=.072$ や「資格を得るために知っている必要があるとされることがら」：$F(2, 197)=2.88$, $p=.059$ については、グループ間の差異について有意傾向であった。これらは、女子大学生に比べて男子高校生が、「学校の先生が教えてくれることがら」を知識として捉える傾向があったため、また女子大学生は高校生男女に比べ、「資格を得るために知っている必要があるとされることがら」を知識であると捉える傾向があったためである。

「知識」に関する自己の信念の発達的変化

次に、知識に関する自己の信念について問うた自己評定の分析結果について報告する。知識に関する信念は、2 つの対呈示された記述においてどちらの考え方により近いかの評定を 8 件法で求めた。まず、各項目の平均評定値についてグループ間の比較したところ、どの項目においてもグループ間の差異は認められなかった。よって以後の分析については、高校生、大学生のデータを込みにして分析した。次に、知識の認識への傾倒の程度を評定スケールの中点を基準とし、対呈示された知識に関する信念の傾向について単一サンプルの t−検定を行った。全ての評定項目において、中点と比して有意な差異がみられた：ps＜.001。高校生および大学生の知識の認識の傾向について、Table 2 にまとめる。

Table 2. 高校生・大学生による「知の認識」の傾向

A		B
B1. 知識はいつも変わることなく，確かなもの	<	知識は必要に応じて変化していくもの
B2. 知識はシンプルで断片的なもの	<	知識は，適切な情報が関係づけられ統合されたもの
B3. 知識は自分の中で論理的に構成されるもの	>	知識は専門家によって与えられるもの
B4. 知識が正しいか否かは専門家が評価するもの	<	知識が正しいか否かは根拠に基づいて導かれるもの
B5. 知ることとは，ゆっくりと時間がかかるもの	>	知ることとは，比較的短い時間で処理できるもの
B6. 知識を獲得する能力は，その人の取り組み次第である	>	知識を獲得する能力は生まれつき決っている

これらより、高校生・大学生の全体的な傾向としては、知識の構造については、「知識は必要に応じて変化する」、「知識は、適切な情報が関係づけられ統合されたもの」ととらえていることがわかる。また、知識の獲得過程については、「知識は専門家によって与えられるもの」ではなく、「自分の中で論理的に構成されるもの」であるとし、「知識が正しいか否かは根拠に基づいて導かれるもの」との認識傾向が強いことがわかる。また、「知る」という営みには、「時間がかかる」とともに、「知識を獲得する能力は、その人の取り組み次第」であるという認識をしていることがわかった。

知識の認識の個人差と進路選択の関係性の検討

ここでは、高校 3 年生の進路選択に関する情報をもとに、進路選択の考え方や決定進路によって、知識の認識が異なるかについて検討を行った。まず、高校生男女の進路決定状況を Table 3 に示す。これらの進路選択に加えて、男子校高校生には働きながら学ぶと回答した者が 1 名、女子高校生には、未決定 3 名、その他 1 名があった。

Table 3. 高校生男女における進路決定状況

Career course	Male	Female	Total
Find employment	11	31	42
Study at college/ vocational school	10	41	51
Study at University	23	13	36
Total	44	85	129

Note: six students gave no responses.

男子高校生と女子高校生の決定進路の分布についてカイ二乗検定を行った結果、男子は大学進学に偏りがある反面、女子高校生では、短大もしくは専門学校への進学や就職を選択したものが多いことが示された：df＝2, N＝129, χ^2＝20.15, p＜.0001。

次に、進路選択における考え方の一つとして、資格取得、大学進学、経済的自立、就職の重要性について評定を求めた結果について報告する。一番重要度の高いものを、その個人が進路選択において重要ととらえているものとして分析した。先の決定進路と進路選択での重要度の選択との関係を Table 4 に示す。進路決定での重要度と実際の決定進路の分布についてカイ二乗検定を行った結果、資格取得よりも経済的な自立という視点を重用視している傾向にある大学進学者や就職者に対し、資格取得を重用視していた短大や専門学校進学者の傾向がみられた：df＝6, N＝128, χ^2＝43.5, p＜.0001。

次にこれらの決定進路によって、「知識の内容」や「知の認識」が異なるかについて検討するため、3（進路：「就職」「短大・専門学校進学」、「大学進学」）×2（性別）の分散分析を行った。知識の内容については Table 5 に、知の認識への傾倒については Table 6 に、

Table 4. 決定進路と進路選択での重要度

	Career Selection			
Importance	Job	College/ vocational	University	Total
Qualification	3	15	4	22
Study at university	0	14	15	29
Financial independence	16	14	13	43
Get an employment	23	7	4	34
Total	42	50	36	128

Table 5. 決定進路別にみた「知識の内容」に関する評定値の平均と標準偏差

Career Selection	Find employment				Study at college/ vocational school				Study at University			
	Male		Female		Male		Female		Male		Female	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
K1	5.73	2.24	7.03	2.55	4.80	2.49	5.78	2.19	4.48	2.66	5.85	3.41
K2	5.27	2.20	4.42	2.63	4.80	2.70	5.10	2.53	4.91	3.07	5.00	2.42
K3	2.73	1.19	4.90	2.34	4.20	2.30	4.15	1.96	4.70	2.62	5.00	2.24
K4	3.91	2.95	3.13	2.43	4.00	2.94	2.30	1.62	5.43	2.27	3.46	1.94
K5	5.09	2.26	5.03	2.27	4.20	2.74	6.28	2.44	5.43	2.43	4.69	2.29
K6	4.18	3.09	3.29	1.95	3.60	2.27	3.22	2.49	3.39	2.23	2.46	2.07
K7	6.09	2.95	6.35	2.68	6.00	2.83	7.45	2.25	5.83	3.13	6.85	2.48
K8	7.45	2.38	6.74	2.41	6.80	3.08	7.08	2.03	7.30	2.25	6.38	2.29
K9	6.91	2.66	5.61	2.74	5.60	2.68	5.33	2.73	5.83	3.00	6.77	2.68
K10	7.91	2.63	8.48	2.08	7.60	3.69	8.25	2.23	7.30	3.04	8.54	2.15

Table 6. 決定進路別にみた「知の認識」に関する評定値の平均と標準偏差

Career Selection	Find employment				Study at college/ vocational school				Study at University			
	Male		Female		Male		Female		Male		Female	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
B1	5.73	2.28	6.32	1.28	5.90	1.97	6.10	1.30	6.22	1.68	6.62	0.87
B2	5.55	2.21	5.44	1.66	5.80	1.81	5.37	1.51	5.48	2.00	5.85	1.57
B3	2.91	1.38	4.00	1.71	4.10	2.18	3.95	1.70	3.59	1.92	4.00	1.63
B4	6.09	1.14	5.76	1.42	5.56	2.07	5.78	1.41	6.22	1.73	5.85	1.52
B5	2.91	1.97	3.29	1.68	2.60	1.78	2.68	1.33	2.87	1.94	2.31	1.32
B6	3.18	2.04	2.55	1.41	2.50	1.27	2.61	1.76	1.96	1.30	1.85	1.14

進路グループごとの記述統計を示す。

分析の結果、性別要因については、「K1 教科書に書かれていることがら」：$F(1, 122)=5.60$, $p=.019$ および「K4 親が教えてくれることがら」：$F(1, 122)=10.87$, $p=.001$ においてのみ、有意な主効果が認められた。進路要因の主効果は、B6「知識を獲得する能力は、その人の取り組み次第であるか、生まれつき決まっているか」の項目のみ：$F(2, 123)=3.35$, $p=.038$ が有意であり、これは大学進学者が他の進路選択者に比べて「能力は、その人の取り組み次第である」との認識が強かったためである。また、「K4 親が教えてくれることがら」：$F(2, 122)=2.96$, $p=.055$ は、進路要因の主効果が有意傾向であった。これは、大学進学者が他の進路選択者ほど、「親が教えてくれることがら」を知識の内容としてとらえていなかったことによる。「K5 様々な考えや情報をもとに検討された結果得られた結論」については、交互作用が有意傾向：$F(2, 122)=3.06$, $p=.051$ であった。これは、「短大・専門学校進学」グループにおいて、男子のほうが女子に比して、「様々な考えや情報をもとに検討された結果得られた結論」をより知識内容であると評定する傾向にあったことによる。

考察

ここでは、「知識の内容」や「知の認識」に関する捉え方が、高校生から大学 1 年生にかけてどのように変化しているのかを理解するための検討を行った。具体的には、高校生および大学生を対象に、これらの認識のどの内容がどのように違うのかに検討するとともに、高校生の進路決定とそれらがどのように関連しているかについて分析を行った。

まず、高校生と大学生のグループ比較から見えてきたことについて考察する。自己がとらえる「知識の内容」について、一番近いものから評定を求めた結果について比較したところ、高校生男子と女子大生においては、高校生女子よりも「教科書にかいてあることがら」をより自分がとらえる「知識の内容」であると評定していた。一方で、女子高校生においては、「親が教えてくれることがら」を、女子大生や高校生男子よりも「知識の内容」として評定していた。これらより、この部分については、高校生男子は高校生女子よりも、むしろ女子大生とよく似た傾向がみられたと考えられる。年齢的な発達よりも、性差を含めた発達を窺わせる結果がみられたのは興味深い。

また高校生女子は、女子大学生よりも「親が教えてくれることがら」を「知識の内容」であると評価していたことより、女性の知識観に限って議論するなら、発達的な違いはあるといえよう。これらは、高校生にとっての親の存在と、大学生にとっての親の存在が、どの程度子どもにとって知識を発信する存在であるとらえられているかとも関係しているのかもしれない。また、高校生男子は、高校生女子や女子大生よりも、「自分が考えたことがら」や「今までだれも考えつかなかった新しいことがら」をより「知識の内容」であると評定していたこととも併せて解釈すると、男子においては、高校 3 年生という時期から既に「知識」は保守的な内容に限らず、革新的で変化する可能性があるという捉え方をしているとも考えられる。

一方で、女子大学生は、「資格を得るために知っている必要があるとされることがら」において、有意傾向ではあるものの、高校生男女より「知識の内容」として評定していた。これらの傾向は、資格取得を目的として大学進学したかどうかとも関係している可能性はあるが、大学選択において自己の進路が現実化することによるとも考えられる。これらの考察も含め、これらが女子大学生における保守的な知識観によるもの

であるのかどうかは、今後大学生男子のデータを検討する中で判断が待たれる。

また、高校3年生においては、大学進学以外の進路決定をしている生徒もいることから、進路決定の背後に「知識の内容」についての捉え方の違いがあるとも考えられる。

このように、知の認識に関する性差の有無については様々な議論があり見解は一致していないところではあるが（Conley, Pintrich, Vekiri, & Harrison, 2004）、本研究の結果から、一部においては性差が確認された。これは、Pintrich（2002）が述べるように、問いの内容の具体化の程度によって性差検出の有無が考えられるとの見解で説明できできよう。本研究でとりあげた「知識の内容」は、高校生においても比較的直感的に理解できる内容であった。このように具体的な内容に対しての自分の考えを問うたためたため、知の認識の性差がみられたと解釈できる。

次に「知の認識」の自己評定の分析結果について考察を行う。ここでは、高校生と女子大学生の捉え方の違いはみられなかった。知識の認識についての対立する価値観についてどの程度傾倒するかについて問うたことから、概観的な知識の捉え方については、高校3年生から大学1年生において大きく変わるものではない可能性を示唆している。これは、前の分析で対象とした「知識の内容」のグループ間差と相容れない結果であるとも捉えられる。しかし、これらの分析から考えられるのは、具体的な視点（知識内容を提示）を与えれば何を知識であると捉えるかについては違いがあるものの、概観的な視点では、一般的なもしくは社会的な望ましさが優位となり、一方の視点が他方の視点に比べより傾倒を促していた可能性もある。

高校生については、決定進路が明確になった時期であったことから、自己の進路と「知識の内容」や「知の認識」の関係について分析した。これらの分析より、決定進路によって、「知識の内容」や「知の認識」のあり方が異なることが明らかになった。具体的には、「知識を獲得する能力はその人の取り組み次第である」と捉える傾向が大学進学を決めている者に有意に多く見られたことから、大学進学の背景には、さらに自分の可能性を探索するための過程として考えている可能性もあるといえる。また、大学進学予定者ほど、「親が教えてくれることがら」を知識の内容としてとらえていなかった傾向は、大学に進学して新たな知識の獲得を志すという一般的な目的と一致するといえよう。一方で、同様に進学するという目的はもっているものの、大学進学予定者と、短大・専門学校進学予定者がこのような点で捉え方が大きく異なる結果がみられたのは興味深い。ここでみえてきた「知の意識」の違いは、大学で何を学ぶのか、また、4年という就学期間への時間的投資のコミットメントの違いにも関係しているかもしれない。

これらより、本研究結果から示唆されることは次にまとめられよう。本研究では、従来、知の認識に関連する研究で用いられてきた質問紙とは別の形式で高校生と大学生の知識観を検討した。これらの方法により、高校3年生から大学1年生への移行の中で知識観に変化が認められるかについて検討したところ、女性については高校から大学への移行の中で、「親が教えてくれることがら」を知識と捉える傾向が減少していくことであった。一方で高校生男子については、高校生女子ほど「親の教えてくれること」を知識として強く捉えていない事から、知識観の性差が高校3年生の段階ですでにあることも示唆された。また高校生については、決定進路と知識観の間に一部関連性がみられた。大学進学する者においては、知識の獲得は固定されるものではなく、柔軟性があると捉えている傾向があること、また「親が教えてくれることがら」を知識の内容としては捉えていない傾向がみられた。これらより、進路決定の背景には、個人のもつ知識観が関連しているといえそうである。

今後の課題としては、大学生男子の発達的な傾向について、高校生男子のそれと比較することである。高校生男子は女子大学生と類似した知識観の評定結果がみられたことから、男性の知識観の発達が女性のそれとどのように異なるか、またどのような要因がそのような知識観の性差をもたらすかについての検討は、大変興味深い。これらの課題への取り組みにより、今回の結果から示唆された知識観の性差についてさらに具体的な知見を提供することが可能となるであろう。

引用文献

Conley, A. M., Pintrich, P. R., Vekiri, I., & Harrison, D.（2004）. Changes in epistemological beliefs in elementary science students. *Contemporary Educational Psychology, 29*（2）, 186－204. doi: http://dx.doi.org/10.1016/j.cedpsych.2004.01.004

DeBacker, T. K., Crowson, H. M., Beesley, A. D., Thoma, S. J., & Hestevold, N. L.（2008）. The Challenge of Measuring Epistemic Beliefs: An Analysis of Three Self－Report Instruments.

The Journal of Experimental Education, 76(3), 281−312. doi: 10.3200/jexe.76.3.281−314

Hofer, B.K., & Pintrich, P.R. (1997). The Development of Epistemological Theories: Beliefs About Knowledge and Knowing and Their Relation to Learning. *Review of Educational Research, 67*(1), 88−140. doi: 10.3102/00346543067001088

平山るみ・楠見　孝（2010）日本語版認識論的信念の尺度構成と批判的思考態度との関連性の検討 Japan journal of educational technology 34 (Suppl.), 157−160, 2010−12−20

野村亮太・丸野俊一（2010）認識的尺度の作成、Annual convention of the Japanese Association of Educational Psychology (52), 498

Pintrich, P. R. (2002). Future challenges and irections for theory and research on personal epistemology. In B. K. Hofer & P. R. Pintrich (Eds.), *Personal Epistemology: The psycholoy of beliefs about knowledge and knowing* (pp. 389−414). London: Routledge.

Schommer, M. (1990). Effects of beliefs about the nature of knowledge on comprehension. *Journal of Educational Psychology, 82*(3), 498−504. doi: 10.1037/0022−0663.82.3.498

田崎勝也・會田祐子・山際梨華・宮田真理子・渡部涼子（2008）. 大学生の「知」の意識：グループ面接による探索的研究. フェリス女学院大学文学部紀要, 43, A1−A22

Students' Personal Epistemology about Knowledge and Their Career Choices

Faculty of Psychology, Department of Psychology
Hiromi TSUJI

Abstract

This study investigated students' personal epistemology (which is their beliefs about knowledge and ways of knowing if it is true) in relation to their career choices. Third year high school students and first year university students completed questionnaires about their epistemological knowledge. The high school students also provided information regarding their career choices. The developmental differences in personal epistemology were examined in relation to the transition from high school to university. The results suggest that there are some differences in their beliefs about knowledge and ways of knowing. The gender differences may also exist in these developmental changes. The high school students' beliefs in the ways of knowing and what is knowledge differed depending on their carrier choices, such as choosing higher education, vocational development, or finding employment.

Keywords: Epistemological beliefs about knowledge, Personal epistemology, Career education